

高校生によるバイオ研究発表会 「バイオ甲子園」

寺本 祐司

バイオテクノロジー研究推進会は、バイオテクノロジーの進歩発展に寄与することを目的に1982年に全国に先駆けて設立された産官学のメンバーからなる団体です。発足当時は「環境問題」や「遺伝子操作」ということばより「公害」や「品種改良」といったことばがメディアではよく使われていました。本会の初代会長は本江元吉先生（九州大学名誉教授）で二代目の会長は上田誠之助先生（九州大学名誉教授）が務められました。両先生はともに九州大学を定年退職後、崇城大学（旧名熊本工業大学）に赴任され、熊本での研究と教育を通してバイオ人材育成や熊本の醸造、食品、環境、医薬などバイオ関連企業の発展に尽力されました。

バイオテクノロジー研究推進会は、①研究助成、②技術の錬磨、③知識の普及、④人材育成の四本柱を中心とした事業を実施しています。その中の人材育成事業として、高校生によるバイオ研究発表会「バイオ甲子園」を開催しています。

2016年の熊本地震の後にも震災からの復興を祈る気持ちをもって、例年通り「バイオ甲子園2016」が開催され

ました。2018年11月17日には27回目となる「バイオ甲子園2018」を熊本市国際交流会館で開催しました（図1）。開催にあたり日本生物工学会九州支部の光富勝支部長に相談申し上げたところ、「バイオ甲子園2018」への共催とサポートを頂き、入賞した9校にそれぞれ日本生物工学会編の『ひらく、ひらく「バイオの世界」』を贈呈することができました。この場をかりて日本生物工学会に深く感謝して御礼を申し上げます。

2018年は11県から25テーマの応募があり、予備審査を通過した6県9校のプレゼンテーションが口頭で行われました。最優秀賞は、市来農芸高等学校（鹿児島県）、優秀賞は熊本北高等学校（熊本県）と国分高等学校（鹿児島県）が受賞しました。今回の協賛企業からの特別賞（株）愛歯賞は宇土中学校・宇土高等学校（熊本県）、特別賞（株）杉養蜂園賞は東明館高等学校（佐賀県）が受賞しました。

「バイオ甲子園」の審査員は産官学の有識者から選出され、協賛企業の方にも審査員をお願いしています。各高校によるプレゼンテーションに対し、審査員は専門の立場から質疑応答やアドバイスをを行います。このコメントやアドバイスは高校生の今後の研究活動にとって非常に有意義なものになっていると思われます。高校生は各企業の審査員との質疑応答により、企業が求めている研究内容や人材についても直接知ることができます。

これまで27年の「バイオ甲子園」の歴史の中で、開始当時は、熊本や九州圏内の高校の参加がメインでした。その後、高校や官公庁やメディアへのポスティングによる広報にはじまり、現在では、新聞、ニュースレター、



図1. バイオ甲子園2018のポスター



図2. 第33回バイオ市民公開講座のポスター

FMラジオ、電子メールやホームページを通しての広報や口コミで、関東、関西、中国、四国、九州・沖縄からの参加や数多くの問合せが来るようになりました。また、初期の「バイオ甲子園」に参加した高校生が、大学に進学し、高校教員となり、生物部の顧問として生徒を引率して「バイオ甲子園」に参加する事例もあります。

「バイオ甲子園2018」の当日は、新聞社からの取材やテレビ局のカメラも入り、プレゼンテーションの様子や審査結果が新聞記事に掲載され、テレビニュースでも報道されました。高校生にとっても顧問の先生や高校生の保護者にとっても貴重な経験になったと思われます。

2019年は、元号もかわり「ラグビーワールドカップ2019」「2019女子ハンドボール世界選手権」など熊本で世界的なイベントが開催されます。それを見すえてバイ

オテクノロジー研究推進会主催の知識の普及事業として「第33回バイオ市民公開講座」も2019年1月19日に熊本市国際交流会館で開催しました(図2)。「スポーツと健康な生活」を総合テーマに、講演ではアスリートの食事にヨーグルトが取り入れられている事例なども紹介されました。

きょうかい9号酵母が分離された県であり、球磨焼酎、灰持酒の赤酒、高菜漬、豆腐の味噌漬、糸引き納豆などの伝統的な酒類や発酵食品が人々に好まれている熊本の地でバイオテクノロジー研究推進会は、昭和57年(1982年)から活動をつづけています。

バイオテクノロジー研究推進会の事務局は崇城大学生物生命学部応用微生物工学科内にあります(<http://www.biotech.gr.jp/>)。